

# 「あなたのやりたいこと」は何ですか？

## ～活動参加推進プログラムの実践を通じて～

鹿児島市小原町 デイサービスはなぶさ

発表者 福元 綾子(介護福祉士) 共同研究者 濱田 ひとみ(准看護師) 中馬 健一(介護福祉士)

### 【はじめに】

当事業所では、これまで利用者が「住み続ける地域の中でもっと様々な活動に参加出来るようになる」為に、エンパワメントの実現を目指して野菜販売(無人販売)の取り組みや体験型レクリエーション等を実施してきた。それについては一定の成果を上げることが出来たが、集団的な取り組みが中心であったので主体的に取り組むメンバーが固定化する傾向にあり、利用者の個別的な能力を十分に引き出すことが出来たとは言い難い。そこで、今回は「それぞれの利用者がやりたいこと」に焦点を当てて、利用者がより目的意識を持って「やりたい活動」に取り組めるよう「活動チェックシート」及び「活動参加推進プログラム」を導入した。まずは試用期間と位置付けて実践を試みたのでここに報告する。

### 【対象者・方法】

・対象者:デイサービスはなぶさ 通所介護利用者 4名(70歳から90歳代、要支援及び要介護1、2より無作為に選出)。

	A氏(男性)	B氏(女性)	C氏(女性)	D氏(女性)
介護度/年齢	要支援2 / 79歳	要介護1 / 83歳	要介護1 / 82歳	要介護2 / 91歳
疾患名	脳出血後遺症(軽度の言語障害)	脳梗塞、バセドウ病	膠原病(リウマチ)	結核(治癒)、高血圧症
MMSE	30/30点	29/30点	29/30点	18/30点
QOL PGC モラールスケール	10/17点	7/17点	10/17点	10/17点
活動内容	「マンカラ」ゲーム	手芸(片手編み機他)	手芸、園芸	手芸(片手編み機)

方法: 期間:平成28年8月1日～9月1日(上記スケールの評価は8月1日に実施)。

- (1) 4名の利用者に「活動チェックシート※1」でISDLの実施状況及び「これからしてみたい(関心があること)」ことについて聞き取り調査を実施。
- (2) 「活動チェックシート」の結果を基に「活動参加推進プログラム※2」にてやりたいことの行動計画表とスタッフの支援内容等を利用者と一緒に行成して、実施する【同時にMMSE、AYM(愛と結の街式ADL評価スケール)、QOL PGC モラールスケール、IADL 尺度の評価を実施】。

※1「活動チェックシート」は厚生労働省の興味・関心シートを参考にIADLの項目に特化した事業所独自のチェックシート。

※2「活動参加推進プログラム」は、利用者の「やりたいこと」を身近なことから地域での活動まで段階別に取り組めるように目標設定～行動計画～評価まで行う事業所独自のプログラム形式。

### 【結果】

- (1) 「活動チェックシート」を用いて利用者のやりたいことを聞き取り調査したが、どの利用者もこのような内容に質問されることに慣れていないこともあり、始めはどのように答えて良いかわからずに戸惑う場面が見られた。しかし、時間を掛けてスタッフとのやりとりを続ける内に自分の想いをしっかりと表出することが出来た。
- (2) A氏はもともと社交的な性格であるが言葉が若干不明瞭なこともあり、他者とのコミュニケーションを控える傾向にあった。しかし、ゲームを通じて他利用者やスタッフとも明るく接するようになってきた。
- (3) B氏は片手編み機に大変興味を示していたが、最初の内はなかなか理解することが出来なかった。スタッフが繰り返しレクチャーした後は上達。短期間で作品を作り上げた(マフラー)。さらに自宅でも自ら編み棒を購入して編み方をマスターした後は、毎日寝食を忘れる位に夢中になって取り組んでいる。
- (4) C氏は園芸活動と手芸の両方に取り組んだ。自宅で要介護者である夫の介護を家族と一緒にっており、相当のストレスを溜め込んでいた。表情も塞ぎがちであったが、熱中出来る時間が作れたことで表情も明るくなりストレスの緩和に繋がった。
- (5) D氏は手芸に取り組む前は、塗り絵に取り組んでいたが次第に関心が薄れて何もしなくなった。しかし、手芸は時にスタッフの声掛けが必要であるがコツコツと取り組んでいる。自宅でも身の回りのことに気が向くようになって、「玄関先の草取りをしたい」「同居している孫に料理を食べさせたい」との想いを語るようになった。

### 【考察・まとめ】

今回は事業所で開発したツールを用いて利用者としてしっかりと向き合い「やりたいこと」を聞き出すことで、これまでスタッフが知らない利用者の想いや可能性に気が付くことが出来た。これまでも野菜販売(無人販売)や体験型レクリエーション等の取り組みを通じて利用者の行動変容を追求してきたが、スタッフの仮説に基づく演繹的な手法に拘っていた為に、知らず知らずの内に多くの場面で利用者の行動を一定の枠に当て嵌めてしまっていたことは否めない。その為、スタッフが利用者の持てる力を引き出すことを考えて行動していたことも、結果的には「本当はこれをやりたい」という利用者の想いに応えていなかったと反省する。また、試用期間の為に十分な成果は出ていないが、この取り組みの可能性を見出すことが出来たのではないだろうか。実際に実践を通して利用者が少しずつ前向きに変わっていく姿を目にする事で、スタッフの意識も次第に変化してきている。

また、「活動チェックシート」はやりたいことを引き出す有効なツールになり得ると考えるが、同時に利用者の想いを引き出す為には相応のスキルが求められることが解った。各項目に囚われ過ぎて上手く聞き出せないこともあったので、今後はスタッフ間で適切な手法を模索していく必要があると思われる。さらに、「やりたいこと」を支援する為には利用者の変わり続けるニーズにもしっかりと順応出来るように、スタッフの高い技能や様々なツールが必要になってくることも考慮しなければならない。

最後に、利用者の「本当にやりたいこと」を十分に引き出して、それに心置きなく取り組めるよう今後も地道に活動を続け、どんなに歳を重ねても夢や希望を当たり前のように語れる環境を築いていきたい。